

ておらず、ことに独居高齢者においてはその貢献度を客観的に評価され得ない。また、有償労働については、高齢者が現役世代と就労において共存共栄するには職種や就業形態に制限を要する場合もあろう。都市化あるいはその逆に過疎化さらには匿名化に伴いコミュニティが崩壊しつつある現代社会において、近隣・友人へのインフォーマルな支援を授受する機会は減少せざるを得ない。こうした背景から、本研究では高齢者の productive activity の中で最も身近で、参加しやすい活動としてボランティア活動に注目した。

ボランティア活動の定義

団塊世代が65歳を迎え、再雇用を終える人が増え始める今年、いよいよ大量のシニア世代が地域デビューするのではと、ボランティア活動に関するニュースが再び、マスコミ報道をにぎわしている。しかし、これまでボランティアの定義についての議論は十分にはなされておらず、時間外労働や偶発的な隣近所への援助までもがボランティア活動と称されることがある。学術研究においてもボランティア活動の定義を明確にしている論文はまれであり¹⁰⁾、大半はその定義を明示していない。広辞苑によるとボランティアとは「Volunteer（義勇兵）志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」と記されており¹¹⁾、社会通念上は慈善や奉仕の心、自己実現、相互扶助、互酬性といった動機に裏付けられた行動と言える。これらの理念は高齢者においては、いきがづくりや社会的サポート・ネットワークに深く関連している。一方、米国のボランティア活動に関する大規模縦断研究「American's Chan-

ging Lives (ACL) Study¹²⁾」では、宗教・教会、学校・教育、政治・労働組合、老人クラブ等、国あるいは地方レベルのグループ活動を通じて、過去1年間にボランティア活動を行った場合を「ボランティア活動あり」と定義している。筆者はこれらを参照し、集団に属して行われるプログラム化された奉仕活動をボランティア活動と定義した。

米国の研究における 高齢者ボランティア活動の健康への影響

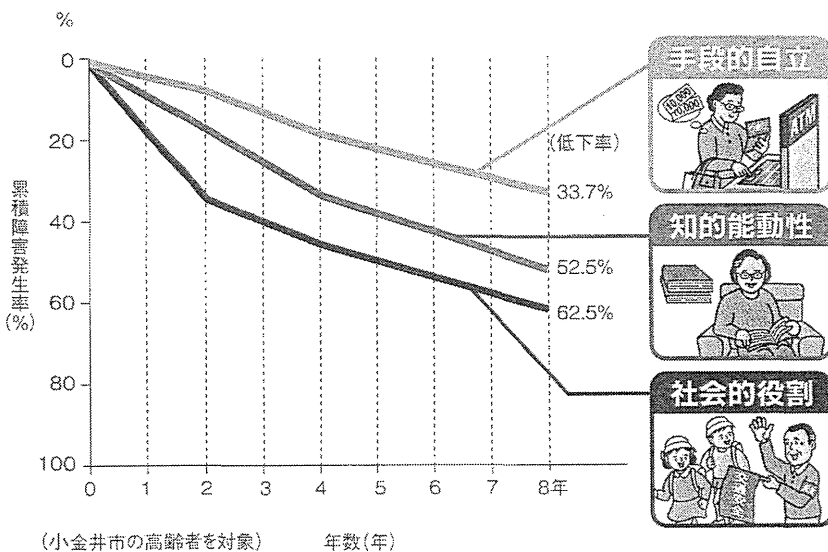
米国は建国以来、教会や学校を中核としてコミュニティが形成されてきたが、その推進力の多くを住民によるボランティア活動が担ってきた。したがって、その歴史は長く、学術研究においてもすでに30年以上前から、ボランティア活動への参加・継続要因やそれが心身の健康に及ぼす効果について分析が進められてきた。そこで、ここではボランティア先進国である米国での知見を概観する。

1. ボランティア活動が心身の健康に及ぼす直接的な効果

ボランティア活動が健康に及ぼす直接的な影響を分析した研究の大半は、生活満足度、抑うつ度、自己統制感、自尊心、健康度自己評価といった心理尺度を目的変数としたものであり、横断研究と縦断研究にいずれにおいても、ボランティア活動と心理的な健康度との関連性が注目されている¹³⁾。

ボランティア活動が身体的健康に及ぼす影響を調べた研究では死亡や身体機能障害のリスクが抑制されるという報告が散見されるものの、その数は心理的效果に関する研究と比べて不足している。その理由の一つとして、ボランティア活動に参加する高齢者の特徴によるバイアスが考えられる。ボランティア活動への参加や継続を促進する要因として低年齢、高学歴、高年収、健康状態が良い、配偶者あり、過去のボランティア経験あり、といった条件がレビューされている¹⁴⁾。もともと心身及び社会的に健康度の高い高齢者ボランティアに身体的な効果が見られるまでには数年間以上の中長期的な追跡が必要と考えられる¹³⁾。こうした対象者のバイアスを除去し、ボランティア活動の真の介入効果を実証するためには、無作為化対照試験に基づく実証が必要である。現時点では、米国においてもボランティアによる

図1 高次生活機能の加齢変化



介入研究はきわめて乏しい。そこで、Friedらは公立小学校において高齢者が学童の読み書きや計算など基礎学習のサポートを行う世代間交流のプログラム、「Experience Corps[®]」¹⁵⁾による介入研究を開始した。Baltimore市内での4～8か月間のパイロット研究では60～86歳の参加者128名の健康度自己評価、手段的自立能力（IADL）、知的能動性、歩行能力の改善が報告されている。

しかし、一般に米国のボランティア活動は宗教や人種による影響がきわめて大きく、社会・文化的な背景の異なるわが国に米国での知見をそのまま適用することは早計であろう。

そこで筆者は、平成15年、現地にて「Experience Corps[®]」の研究に携わり、わが国への応用を試みた。導入にあたり、プログラムの基本コンセプトは高齢者による世代間交流を通じた「社会貢献」「生涯学習」「グループ活動」とした。具体的なプログラムはクライアントである学校側のニーズと高齢者側のニーズと実行可能性を考慮して、平成16年より高齢者ボランティアによる子どもへの絵本の読み聞かせを通じた世代間交流による介入研究“REPRINTS (Research of Productivity by Inter-Generational Sympathy)”を開始した¹⁶⁾。9か月間の効果として、ボランティア群は対照群に比べて、健康度自己評価や社会的ネットワーク、体力の一部において有意な改善または低下の抑制がみられ、部分的ではあるが「Experience Corps[®]」の知見をわが国においても確認しえた（第4章にて詳述）。

2. 心身の健康にとって望ましいボランティア活動の内容、時間、所属団体数とは

(1) ボランティア活動の内容による効果の違い

ボランティア活動の内容による効果の違いを分析した研究はきわめて限定される。世代間交流のある群での生活満足度は高かったとの報告と、教会・宗教関係のボランティア活動がより心理的・身体的健康への効果が大きいとする報告が見られるのみである¹³⁾。これまでの国内外の高齢者の生活機能維持・低下予防に関する研究成果をもとに考察される望ましいボランティア活動とは、高齢者の廃用障害を予防する目的からは、定期的な外出を伴う活動、知的好奇心を刺激し知的能動性を維持できる活動、また、社会的孤立を予防する目的からは、グループやチームで活動でき、日常生活の中で継続性のある活動であり、筆者はこれを推奨している（図2）。

(2) ボランティア活動の時間及び所属団体数による効果の

違い

高齢者のボランティア活動において心身への負荷を考慮した場合に、どの程度の従事量が望ましいかを検討することは重要である。その至適時間のカットオフポイントは年間40～100時間程度との報告が散見されるが、一致した見解は得られていない¹³⁾。

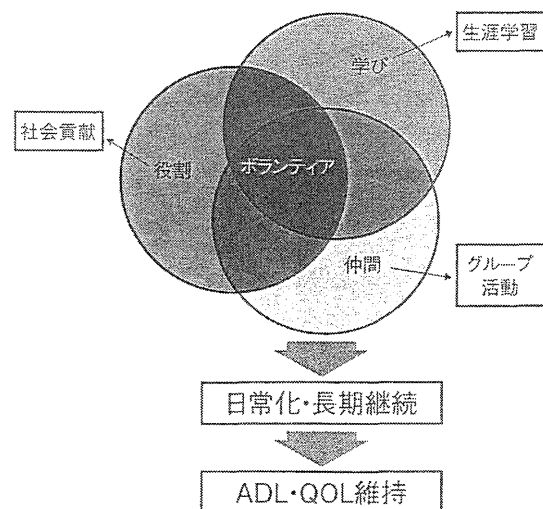
1つのボランティア活動に特化すべきか、複数の活動をバランスよく同時に継続することが心身の健康にとって好影響を与えるかといった議論は地域でボランティアを募集する際に考慮すべきである。2つ以上のボランティア団体に属している場合には総死亡のリスクが有意に抑制されるが、1つだけなら抑制効果は見られなかった¹⁷⁾という報告がある一方で、0または2つ以上の団体に属する場合よりも1つだけの場合に総死亡のリスクが最も低かった¹⁸⁾という報告がある。さらに、0、1つ、2つ以上と所属する団体が増えるにつれて心理的健康に好影響が見られる¹⁹⁾との報告もある。一方、年間100時間（週2、3時間）程度までは従事時間が長いほど好影響を与えたが、それを超えると効果は徐々に減少すること、所属団体の数による効果の違いはない²⁰⁾との報告もあり、現在のところ所属団体数の至適水準についても議論が続いている。

ボランティア活動はあくまで個人の生活の一部に過ぎない。よって、心身の健康にとって望ましい内容や参加の時間・程度は個人の生活背景ごとに異なるであろう。また、同一時間従事した場合でも、世話役ボランティアと一般ボランティアでは心身への負荷は異なるかもしれない。

実践的な研究としての課題と方向性

わが国において高齢者ボランティアと心身の健康に関す

図2 望ましい高齢者ボランティアプログラムの内容



る研究は始まったばかりである。そもそも、住民が善意に基づき自発的に行うボランティア活動の効果を研究する意義自体に疑問を感じる人もいるかもしれない。欧米に比べてボランティア活動の歴史が浅いわが国においては、望ましいボランティアプログラムが開始されたとしても、他地域へ拡大・展開していくことは容易ではない。近年、行政当局もようやく、自助、公助を補う概念として共助の重要性をスローガンに明示するようになった。しかしながら教育・医療・福祉といった専門職集団が現場を統括する部署においては、ボランティアを導入することに抵抗がある場合が少なくない²¹⁾。まさに、総論賛成・各論反対という風潮が根強く残っている。こうした偏見を払拭する一つの方策がボランティアを導入することによる利点と課題についてエビデンスを提示することではなからうか。また、現場で指示されたプログラムは専門職間で施設や機関を超えて広がり、それを行政当局が施策として取り入れるといった、点から線、線から面への理想的な普及・展開が見込まれる可能性を秘めている。そうした意味で、ボランティア活動に関する研究は今後、さらに学際的かつ実践的な視点で推進されるべきであると筆者は考える。

しかし、現実にはボランティア活動を行うことによる介入効果は無作為化対照比較試験により厳密に評価すること

は容易ではない。なぜなら、ボランティア活動とはそもそも長期間・継続的に自主的・創造的な姿勢での参画を前提とした社会活動である。厳密な条件設定が比較的容易な医療・運動・栄養学的な介入プログラムとは本質的に異なるからである。またボランティア活動をとおして、心身・社会的な活動性が高まり、生活全体の活性化をねらいとするため効果が発現するメカニズムはプログラムの内容や従事量により異なってくる可能性がある。よって、ボランティア活動の効果を総じて論じることは困難だと言える。

しかし、ボランティア活動は実践活動である。ボランティア活動に対して多様なニーズを持つ住民への普及啓発を進めるためには、より多様なプログラムを具体的に提示していくことが重要である。折しも、栄養・食育や体操・ウォーキングといった介護予防に直に結びつきやすいボランティア活動のみならず、団塊世代の地域デビューやNPO活動の普及により、アイデアが豊富で魅力的なプログラムが近年、多数紹介されている。研究者や実務者が互いに連携し、ボランティア活動に関する長期・大規模追跡調査の知見を待たずしても、これら新たな地域のリソースと協働しながら小規模であっても、地域の事情を考慮した多彩なボランティアプログラムを開発・評価していくことが望まれよう。

【引用文献】

- Morrow-Howell N, Hinterlong J, Sherraden M, eds. *Productive Aging: Concepts and Challenges*. Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins University Press, 2001.
- Rowe JW, Kahn RL. Successful aging. *Gerontologist* 1997;37:433-40.1.
- 古谷野亘. サクセスフル・エイジング, 幸福な老いの研究, 新社会老年学, 古谷野亘・安藤孝敏 編. 東京:ワールドプランニング, 2003: 141-152.
- Fujiwara Y, Shinkai S, Watanabe S, et al. Longitudinal changes in higher-level functional capacity of an older population living in a Japanese urban community. *Arch Gerontol Geriatr* 2003; 36: 141-153.
- Herzog RA, Kahn RL, Morgan JN. Age differences in productive activities. *J Gerontol* 1989; 44:S129-138.
- 柴田博. サクセスフル・エイジングの条件. *日本老年医学雑誌* 2002; 39: 152-154.
- Glass TA, Seeman TE, Herzog R, Kahn R, Berkman LF. Changes in productive activity in late adulthood: MacArthur Studies of Successful Aging. *J Gerontol* 1995; 50: S65-S76.
- Glass TA, Mendes de Leon CF, Marottoli RA, Berkman LF. Population based study of social and productive activities as predictors of survival among elderly Americans. *BMJ* 1999; 319: 478-483.
- Wang HX, Karp A, Winblad B, Fratiglioni L. Late-life engagement in social and leisure activities is associated with a decreased risk of dementia: A Longitudinal Study from the Kungsholmen Project. *Am J Epidemiol* 2002; 155: 1081-1087.
- 杉原陽子. 第4章 「生涯現役」をめぐる疑問. 生涯現役の危機. *ライフプランニング*, 2003: 107-136.
- 広辞苑—第五版. 新村出編. 岩波書店, 1998.
- House JS. *American's changing lives, Waves I and II*, 1986 and 1989. Ann Arbor, MI: Interuniversity Consortium for Political and Social Research, 1995.
- 藤原佳典・杉原陽子・新開省二. ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—. *日本公衆衛生雑誌*2005; 52: 293-307.
- Herzog AR, Morgan JN. Formal volunteer work among older Americans. In R. Bass SA, Francis GC, Chen YP (Eds.), *Achieving a productive aging society*. Westport, CT: Auburn House, 1993.119-142.
- Fried LP, Carlson MC, Freedman M, et al. A social model for health promotion for an aging population: initial evidence on the Experience Corps model. *J Urban Health*. 2004; 81:64-78.
- 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀 他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム—“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果—. *日本公衆衛生雑誌*2006; 53: 702-14.
- Musick MA, Herzog R, House JS. Volunteering and mortality among older adults: findings from a national sample. *J Gerontol* 1999; 54B: S173-S180.
- Oman D, Thoresen C, McMahon K. Volunteerism and mortality among the community-dwelling elderly. *J Health Psychology* 1999; 4:301-316.
- Van Willigen M. Differential benefits of volunteering across the life course. *J Gerontol* 2000; 55B: S308-S318.
- Morrow-Howell N, Hinterlong J, Rozario PA, et al. Effects of volunteering on the well-being of older adults. *J Gerontol* 2003; 58B: S137-S145.
- 藤原佳典: 第1章2節 教育現場における高齢者ボランティアを阻む諸要因—「りぶりんと」プロジェクトから. 世代間交流学の創造—パラダイムの転換を視座として (草野篤子・金田利子・藤原佳典・間野百子・柿沼幸雄編著), 2010, pp.110-121 あけび書房.

高齢者見守りセンサーに関する研究の現状と課題

小池高史, 野中久美子, 渡邊麗子, 深谷太郎, 藤原佳典

● 抄録 ●

見守りセンサーに関する研究で、これまでに何が検討され、明らかにされてきたかを把握しようと試みた。「CiNii」「PubMed」を用いて検索された研究のなかで、見守りセンサーと関係のあるものを抽出した。和文の論文は90編あり、2002年以降、顕著に論文数が増加していた。各論文が掲載されている雑誌の属する分野は、医学・看護学分野と工学分野に分けられたが、工学分野での研究が大半を占めていた。英文の論文は77編あり、2000年代後半以降に急増していた。検索された研究の多くは、センサー機器やセンサーを用いた見守りシステムの開発を報告するものや、センサー自体の機能を検証するものであった。少数の医学・看護学系研究においても、その対象や検討範囲は限定されていた。今後は、見守りセンサーによって高齢者のADLやIADLといった生活機能が維持されるかどうかという点に加えて、主観的幸福感や生活満足度が向上するかなどという心理的側面の検討も必要だと考える。

Key words : 独居高齢者, 見守り, 見守りセンサー

老年社会科学, 34 (3): 412 - 419, 2012

I. 諸 言

1. 独居高齢者の増加

わが国において、超高齢社会や核家族化の進展とともに独居高齢者の増加やそれに伴う高齢者の社会的孤立さらにはその終末像といえる孤立死が社会問題化している¹⁾。2010年の国勢調査によれば、高齢者の16.4%、4,791,000人が独居高齢者となっている。5年前の前回調査時から、全国で独居高齢者は約900,000人増加したことになる。また同年の東京都の調査によれば、独居高齢者のうち、寝たきりや重い障害のある高齢者は16.5%であった²⁾。身体機能が低下した独居高齢者は、孤立死の

ハイリスク者でもあり、心身機能の変化を早期に発見し対応することが、独居生活を安心して継続していくうえで重要である。

2. IT機器による独居高齢者の生活サポート

藤原は独居高齢者の孤立を予防し、安心・安全な生活を支える仕組みとして、①社会活動への参加の促進によるネットワークづくり、②近隣や友人、別居家族との交流を通じたネットワークによる声かけ・見守り、③行政や民間サービスによる異変察知・緊急通報システム等ハード面の整備に大別した。そのうえで①～③をそれぞれ孤立の一次、二次、三次予防と操作的に定義し、社会的孤立ないし孤立死予防の三層のディフェンスラインとした³⁾。一次、二次予防の資源となる町内会や近隣関係などは、伝統的にわが国の地域共同体的なかにあったものであり、もともとある社会的資源

受付日：2012.2.16 / 受理日：2012.5.20

Takashi Koike, Kumiko Nonaka, Reiko Watanabe, Taro Fukaya,
Yoshinori Fujiwara : 東京都健康長寿医療センター研究所
〒173-0015 東京都板橋区栄町 35-2

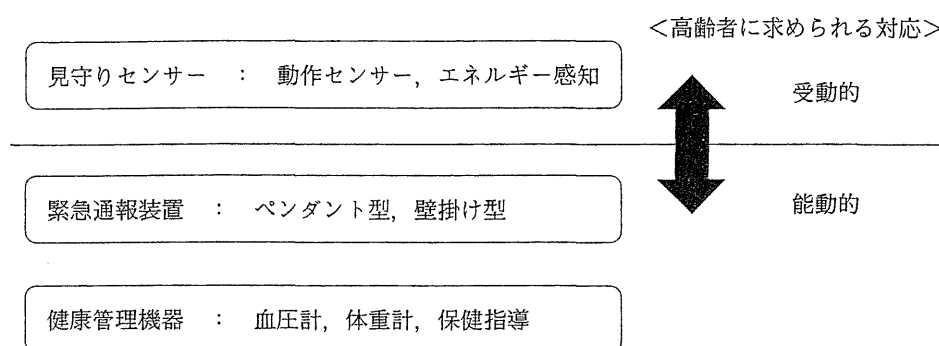


図1 独居高齢者の生活を支えるIT機器

を利用することで独居高齢者の孤立は予防できるとも考えられる。しかし、実際には加齢に伴い長期的かつ頻繁な社会活動の維持は容易でないことや、近隣・地域組織の崩壊などで一次、二次予防のみに依拠するには限界がある。そこで三次予防として、いわゆる高齢者見守りセンサー（以下、見守りセンサー）や緊急通報装置などのIT機器を利用したサポートによる補完が期待される¹⁾。独居高齢者の生活を支えるIT機器は、見守りセンサー、緊急通報装置、健康管理機器に分類される（図1）⁴⁾。そのほか、認知症高齢者を主な対象としたGPSを使った居場所確認装置など、携帯電話に搭載され普及しているものもあるが、それらは対象を独居高齢者に限定しているわけではない。また、介護ロボットの開発も脚光を浴びているが、価格面から地域での実用化には尚早である⁵⁾。

見守りセンサーには、赤外線を利用した動作センサーやドア開閉センサーのような高齢者の行動を直接感知するものと、水道・ガスや電化製品の利用状況など、高齢者の行動に合わせて変化するものを感知し、間接的に高齢者の生活を見守るものがある。見守りセンサーで異常を感知した際には、別居の家族等遠隔で見守る者の対応を促すことになる。緊急通報装置とは、急性の傷病や災害などで緊急に救護を要請したいときにペンダント型や壁掛け型などの専用の端末を用いて、高齢者自らが関係機関へ連絡する機器を指す。健康管理機器とは、高齢者自身が計測した血圧や体重とい

った日々の健康状態のデータを、インターネットを介して医療機関等遠隔で見守る者に伝達する機器であり、それをもとに高齢者は食事などの保健指導を受けることができる。本間ら⁶⁾の研究では、ITを利用した健康管理機器により、健康状態の改善が導かれている。

緊急通報装置や健康管理機器が、高齢者自身の能動的な対応を必要とするのに対して、見守りセンサーは設置するだけで生活の様子や安否状況を自動的に家族等の外部の関係者に伝えることができる。したがって、緊急通報装置や健康管理機器に比べて、見守りセンサーはより心身機能の低下した高齢者をも対象としうる機器といえる。心身機能が低下した独居の後期高齢者の増加が予想される社会状況からみても、今後の利用の拡大が求められるだろう。また、地域での高齢者見守り活動や地域包括ケアの担い手不足が問題となっており^{7,8)}、見守りセンサーはそれを補填するものとして期待される。そこで本稿では、独居高齢者の生活を支えるIT機器のなかでも見守りセンサーに焦点を当てることにする。一般に「見守りセンサー」という言葉で示される機器は、高齢者の見守り用の機器に限らないが、本稿では高齢者を対象とした機器やサービスに限定して検討する。また、見守りセンサーはそれだけで個別に利用されることもあるが、見守りシステムの一部として利用されることもある。本稿では、両者のケースを含めて見守りセンサーの利用ととらえ、研究対象とする。

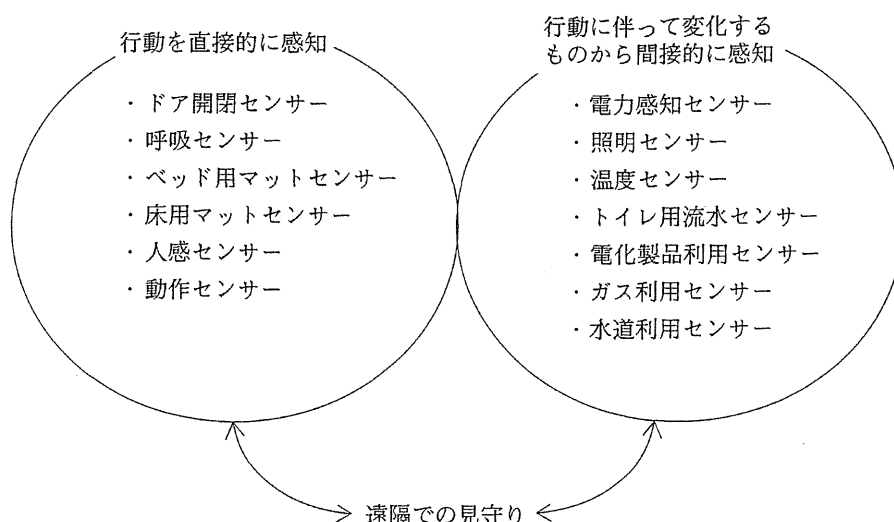


図2 商品化されているサービスとしての見守りセンサー

見守りセンサーは、独居高齢者やその家族からのニーズが高いと予想され、多くの企業によって多種多様なサービスが商品化されている⁹⁾。図2は、わが国で展開されている主なサービスを機能によって分類したものである。ただし、実際のサービスには、図2に挙げたセンサーを複数組み合わせ、包括的な見守りを目指すものも多い。

このように高齢者向けビジネスの一端をになう見守りセンサーであるが、その有効性や課題に関する研究はこれまで総括されていない。今後さらに見守りセンサーが普及する可能性があるなか、それについてなにがどこまで明らかにされているかを確認しておくことが求められる。本稿では、これまでの見守りセンサーに関する研究でなにが検討され、明らかにされてきたかを把握することを目的とする。それによって、今後の見守りセンサーを利用した支援の実践や研究をどのように進めていくべきかについての示唆を得られると考えられる。

II. 方法

和文でまとめられた研究については、医中誌webの情報もカバーする国立情報学研究所の「CiNii」を用いて検索した。高齢者を対象とした見守りセンサーを対象とするため、検索語は「高

齢者 (AND) センサ」および「老人 (AND) センサ」とした。英文でまとめられた研究については、「PubMed」を用いて検索した。検索語は、「elderly (AND) monitoring (AND) sensor」「aged (AND) monitoring (AND) sensor」「senior (AND) monitoring (AND) sensor」の3通りを試みた。検索範囲は、和文・英文共に2011年7月までの全時期である。検索された研究のなかで、在宅で利用されるものと病院や施設で利用されるものの両者を含めて、見守りセンサーと関係のあるものを筆者が抽出した。抽出された論文を、センサーが使用される場所(在宅/病院・施設)、センサーの種類や機能、検証された項目によって分類し分析した。

III. 結果

1. わが国における見守りセンサーに関する研究の動向

CiNiiでは「高齢者 (AND) センサ」で171編、「老人 (AND) センサ」47編の論文が検索された(2011年8月2日時点)。そのなかで見守りセンサーと関係があるとみなされたのは、90編であった。

検索された和文による見守りセンサーに関する最初の研究は、1993年のものであった。それ以降、少しずつ研究が蓄積されてきた様子がわかった

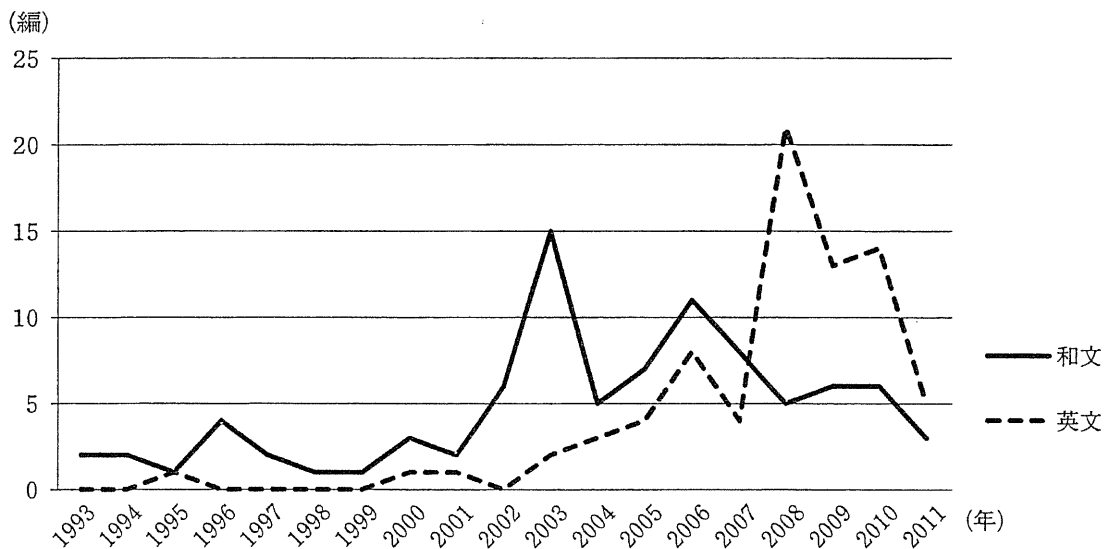


図3 見守りセンサーに関する論文数

が、2003年に15編と、急増していた。また、2002年以降は各年5編を超える論文が検索された。

各論文が掲載されている雑誌の属する分野は、医学・看護学分野と工学分野に分けられたが、医学・看護学分野が15編、工学分野が75編と工学分野での研究が大半を占めていた。

2. 海外での見守りセンサーに関する研究の動向

英文による研究の検索結果は、「elderly (AND) monitoring (AND) sensor」741編、「aged (AND) monitoring (AND) sensor」714編、「senior (AND) monitoring (AND) sensor」2編であった(2011年8月3日時点)。そのなかで見守りセンサーと関係があるとみなされたのは、77編であった。

検索された英文による見守りセンサーに関する最初の研究は、1995年のものであった。しかし、その次の研究となると、2000年のものになり、本格的に研究が蓄積されるようになったのは2000年代以降といえる。また、21編の論文が発表された2008年を中心として、英文による研究は2000年代後半以降に増加していた。発表年ごとの論文数を図3にまとめた。

3. 検索された研究での検討項目と知見

国内外共に検索された研究の多くは、センサー機器やセンサーを用いた見守りシステムの開発や、センサー自体の機能の検証結果を報告するものであった(157編)。それらの成果は、独居高齢者の生活機能の維持に向けた生活支援における見守りセンサーの有効性という最終アウトカムに到達するための、中間アウトカムといえるものであった。同様の傾向は、Carswellら¹⁰⁾による認知症高齢者の夜間見守り機器に関する文献のレビューでも認められた。一方で、最終アウトカムとなる見守りセンサーの高齢者自身への効果を主題とした研究は、今回の検索結果ではみられなかった。しかしながら、高齢者を見守る側の家族や職員への影響や見守りセンサーを用いた支援の可能性を示した研究は複数存在した。そのうち、施設や病院での介護や治療における見守りセンサーの有効性を検証した研究が2編^{11, 12)}、在宅高齢者の生活支援における見守りセンサーの有効性や可能性を検証した研究は5編であった。本研究では、とくに独居高齢者の生活を支えるための見守りセンサーに着目したため、在宅高齢者の生活支援を対象とした研究を取り上げた(表1)。

以下に表1に提示した研究の知見をまとめる。

表1 在宅高齢者の生活支援を対象とした研究の検討項目・内容

題名	著者 (first)	発表年	雑誌名	機器の種類	検討項目・内容	結果
Ethical Considerations in the Conduct of Electronic Surveillance Research	Bharucha AJ ¹³⁾	2006	The Journal of Law, Medicine & Ethics	・多様なセンサー	・倫理的課題 ・利用者のプライバシー	・介入研究の前提となる理論的考察
The Acceptability of Home Monitoring Technology among Community-Dwelling Older Adults and Baby Boomers	Mihailidis A ¹⁴⁾	2008	Assistive Technology	・多様なセンサー	・世代別の見守りセンサーの受容度 ・種類別・機能別の見守りセンサーの受容度	・世代別の見守りセンサーの受容度：高齢者<中年世代 ・種類別・機能別の見守りセンサーの受容度：センサーの種類や設置箇所によって受容度に差
Elderly persons' perception and acceptance of using wireless sensor networks to assist healthcare	Steele R ¹⁵⁾	2009	International Journal of Medical Informatics	・多様なセンサー	・見守りセンサーの受け入れに関する要因	・見守りセンサーの受け入れに関係する要因：もっとも影響するのは機器の費用
Intelligent Systems for Assessing Aging Changes	Kaye JA ¹⁶⁾	2011	The Journal of Gerontology	・赤外線動作センサー ・ドア開閉センサー ・歩行速度センサー	・年齢別の歩数・歩行速度 ・年齢別の外出頻度・外出時間 ・年齢別のコンピュータ利用時間	・歩数：後期高齢者>前期高齢者 ・歩行速度：後期高齢者<前期高齢者 ・外出頻度：後期高齢者>前期高齢者 ・外出時間：後期高齢者<前期高齢者 ・コンピュータ利用時間：後期高齢者>前期高齢者
Real World Implementation Lessons and Outcomes from the Worker Interactive Networking (WIN) Project	Mahoney DM ¹⁷⁾	2008	Telemedicine and e-Health	・居家用赤外線動作センサー	・介護者の満足度・労働意欲 ・介護の生産性・効率性 ・介護者のストレス	・介護者の満足度・労働意欲：向上 ・介護の生産性・効率性：向上 ・介護者のストレス：減少

まず Bharucha ら¹³⁾ は、見守りセンサーを用いた介入研究を実施するに先立って検討すべき倫理的課題として、プライバシーの保護、秘密の保持、そしてインフォームド・コンセントについて論じていた。

見守りセンサーの受容度に関しては、Mihailidis ら¹⁴⁾ によれば、コンピュータに慣れ親しんでいる中年世代と高齢者を比較すると、中年世代のほうがより見守りセンサーの利用を受け入れようとしていた。そのため、現在の高齢者には抵抗感をも

たれやすい見守りセンサーであっても、将来の高齢者には受け入れられていく可能性がある。また、センサーの種類や家のなかでセンサーを設置する場所によっても抵抗感に差があった。Steele ら¹⁵⁾ の調査によれば高齢者が見守りセンサーを受け入れるかどうかということに大きく影響するのは、費用の面であることが指摘されたが、受け入れられる具体的な金額の上限までは明らかにされていなかった。

Kaya ら¹⁶⁾ の研究では、見守りセンサーが高齢者

の活動量を計測することに用いられており、それによって前期高齢者と後期高齢者で異なる日常生活の様子が把握されたが、その結果を用いた生活サポートやその効果の検討はなされておらず、著者ら自身によっても今後の課題として指摘されていた。

効果について検証したMahoneyら¹⁷⁾の研究では、自宅で暮らす高齢者の介護のために、動作センサーで高齢者の生活状況を遠隔で把握したところ、介護における労力を有意に減らすことができ、介護の満足度や介護意欲の向上、ストレスの減少といった変化もみられた。

IV. 考 察

身体機能が低下した高齢者を含む独居高齢者の増加に伴い、見守りセンサーを利用した高齢者の生活サポートの必要性が高まっている。地域包括ケア体制の人材不足を解消するためにも、見守りセンサーに期待される場所は大きい。しかしながら、見守りセンサーの高齢者自身への効果に関する研究は、国内外共にまだ十分になされていないことが文献のレビューから明らかになった。

センサー技術の進展に従い、90年代以降、見守りセンサーに関連する研究は積み重ねられてきたが、その主流はセンサーの開発やその機能を検証する研究であり、見守りセンサーの有効性に関する研究は少数であった。2000年代の後半になると、海外では有効性に関する研究がみられるようになったが、国内の研究はその流れに遅れをとっている。とはいえ2000年代の後半以降に発表された見守りセンサーの有効性に関する海外の少数の研究においても、その対象や検討範囲は限定されたものにとどまっている。

研究が不十分なものにとどまる原因としては、見守りセンサーの開発が近年になって始まったものであるため、まだ機器やシステムの開発や機能の検証を行っている段階であることが挙げられる。また、見守りセンサーを実際に用いるには、見守られる側の抵抗感^{14, 18)}や費用負担^{15, 19)}の問題

があり、期待されるほどに利用が広まっていない。そのため、見守りセンサーの利用をいかにして拡大していくかという点が課題として認識される一方、見守りセンサーを利用して見守る介護者や見守られる高齢者にとっての利益や不利益の検証という点にはあまり目を向けられていないのが現状だといえよう。

今後、独居高齢者の生活を効果的に支援する仕組みを開発していくために、検討すべき課題が多く残されている。見守りセンサーを利用することによって、高齢者の行動や生活の様子の変化を早期に発見し介護予防につなげていくことで、Activities of Daily Living (ADL) や Instrumental ADL (IADL) といった生活機能が維持されるかという点に加えて、それによって主観的幸福感や生活満足度が向上するかという心理的側面の検討も必要であろう。次々に新しい機器が開発されている見守りセンサーが、独居高齢者のQuality of Life (QOL) の維持・向上に真に有効であるのか、また、より効果的なセンサーの活用方法や利用への抵抗感がどのようなものであるかを明らかにしていく研究が求められていると考えられた。

本研究は、平成23年度厚生労働省科学研究費補助金(認知症対策総合科学)「認知機能低下高齢者への自立支援機器を用いた地域包括的システムの開発と評価」(H23-認知症-一般-001, 研究代表者: 藤原佳典)の助成によって行ったものである。

文 献

- 1) 藤原佳典:高齢者の社会的孤立とその予防戦略. 公衆衛生, 75: 281-284 (2011).
- 2) 東京都福祉保健局:平成22年度「高齢者の生活実態」報告書(2011).
- 3) 藤原佳典:厚生労働省科学研究費補助金・政策科学総合研究事業「行政と住民ネットワークの連携による孤立予防戦略の検証」平成22年度総合・総括・分担研究報告書(研究代表者: 藤原佳典) (2011).
- 4) 森 一彦, 生田英輔:高齢者生活を支える住環境・機器と情報支援. 老年精神医学雑誌, 19: 322-330 (2008).
- 5) 読売新聞:介護ロボットで足取り軽やか(<http://job.yomidr>).

-
- jp/news/091208_000140.htm, 2011.8.1) (2009).
- 6) 本間聡起, 鈴木博道, 兵藤 郷ほか: 遠隔医療による生活習慣改善への介入試験. 日本人間ドック学会誌, 24: 140-145 (2009).
 - 7) 小池高史, 西森利樹, 堀 恭子ほか: 民間団体による独居高齢者への支援活動の現状と課題; 支援団体へのインタビューから. 技術マネジメント研究, 10: 27-35 (2011).
 - 8) 筒井孝子: 改正介護保険法における地域包括ケア体制とは; 地域包括支援センターの課題. 保健医療科学, 55 (1) : 10-18 (2006).
 - 9) 安否確認「見守りサービス」の今; 新たなライフライン. 毎日新聞, 10 (2011年9月19日).
 - 10) Carswell W, McCullagh PJ, Augusto JC, et al. : A Review of the Role of Assistive Technology for People with Dementia in the Hours of Darkness. *Technology and Health Care*, 17 : 281-304 (2009).
 - 11) 鳥羽研二, 須藤紀子, 長野宏一郎ほか: 薄膜型排尿センサを用いた, 高齢者機能性尿失禁患者の排尿にともなうQOL改善の試み. 日本老年医学会雑誌, 33: 681-685 (1996).
 - 12) 内田勇人, 藤原佳典, 谷口和彦ほか: 非拘束なモニタリングシステムによる見守り支援が介護スタッフに及ぼす影響. 老年社会科学, 33 (1) : 60-73 (2011).
 - 13) Bharucha AJ, London AJ, Barnard D, et al. : Ethical Considerations in the Conduct of Electronic Surveillance Research. *The Journal of Law, Medicine & Ethics*, 34 : 611-619 (2006).
 - 14) Mihailidis A, Cockburn A, Catherine L, et al. : The Acceptability of Home Monitoring Technology Among Community-Dwelling Older Adults and Baby Boomers. *Assistive Technology*, 20 : 1-12 (2008).
 - 15) Steele R, Lo A, Secombe C, et al. : Elderly Persons' Perception and Acceptance of Using Wireless Sensor Networks to Assist Healthcare. *International Journal of Medical Informatics*, 78 : 788-801 (2009).
 - 16) Kaye JA, Maxwell SA, Mattek N, et al. : Intelligent Systems for Assessing Aging Changes; Home-Based, Unobtrusive, and Continuous Assessment of Aging. *Journal of Gerontology*, 66B : i180-i190 (2011).
 - 17) Mahoney DM, Mutschler PH, Tarlow B, et al. : Real World Implementation Lessons and Outcomes from the Worker Interactive Networking (WIN) Project; Workplace-Based Online Caregiver Support and Remote Monitoring of Elders at Home. *Telemedicine and e-Health*, 14 : 224-234 (2008).
 - 18) 品川佳満, 橋本勇人: 人間性へ配慮した高齢者見守りシステムの開発. 川崎医療福祉学会誌, 11: 199-204 (2001).
 - 19) 下関千春: 高齢者の見守り. ライフデザインレポート, 198: 4-15 (2011).

Current status and issues surrounding research on elderly monitoring sensors

Takashi Koike, Kumiko Nonaka, Reiko Watanabe, Taro Fukaya, Yoshinori Fujiwara

Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology

This study focused on research carried out on monitoring sensors, and attempted to make clear the points clarified by the research. We searched for Japanese papers on “CiNii” and for English papers on “PubMed”, in order to extract from the search results studies related to monitoring sensors. We found 90 Japanese papers related to monitoring sensors. The first study was written in 1993, and the papers remarkably increased from 2002. The fields of the journals in which these papers were published ranged from medical science to engineering. The majority were in engineering research. We found 77 English papers related to monitoring sensors. The first of these studies was written in 1995, and the number of papers remarkably increased from the late 2000s. Most of the previous research had been reports of developments or mechanical functions of sensors. In a few examples of medical researches, the subjects and range of examination had been limited. There are still many issues concerning monitoring sensors which remain to be considered. It is necessary to examine effects in psychological aspects like subjective well-being and life satisfaction. in addition to ADL and IADL.

Key words : elderly living alone, monitoring, monitoring sensor

多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉亭利用者の地域生活様態と その地域社会における意義

－多摩ニュータウンの高齢者支援スペースと利用者の地域生活様態に関する研究（その2）－

FUKUSHITEI, A SUPPORTING PLACE FOR SENIOR CITIZENS IN TAMA NEW TOWN: A STUDY ON THE LIVING STYLES OF THE USERS AND ITS ROLES PLAYED IN THE LOCAL AREA

－ A study on a supporting place for senior citizens in Tama New Town and the users' living styles (Part 2) －

余 錦 芳*, 松本真澄**, 上野 淳***

Chingfang YU, Masumi MATSUMOTO and Jun UENO

There have been developed into 10 gathering places for senior citizens in Suwa-Nagayama, Tama New Town, in the west of Tokyo, of which Fukushitei, an NPO found by the local people, is the most characteristic. The utilization of Fukushitei has been discussed in the former study. This research studies the significance of both the existence and usefulness of Fukushitei for its users, who are senior citizens of Tama New Town, and the neighborhood by analyzing life styles of the users there.

Through the hearing approach, 48 regular users of Fukushitei are studied. All 48 people live in their own houses and are able to manage their daily lives by themselves. Most of them go out everyday, among them are few need assistance from their family members, relatives, or helpers.

All kinds of life styles are discovered from the 48 people: Some people go out only to Fukushitei; apart from where they go no where and do nothing fun with either their friends or neighbors. Others are so active that they go to different places making different friends, and are engaged in amusements or voluntary work. Their activities are analyzed, classified and discussed.

Keywords: *New Town, Senior Citizen, Place, Senior Citizens Supporting Place, Living Style, Social life in local Community*
ニュータウン, 高齢者, 居場所, 高齢者支援スペース, 生活様態, 地域生活

本稿は前報（その1）¹⁾に続くものであり、多摩ニュータウン（以下：多摩NT）における高齢者支援スペース・福祉亭の常連利用者の地域生活の様態と彼等にとって福祉亭の存在がどのような意義を持っているかを考察することを目的としている。

1. 本研究の背景と目的

研究の背景や既往研究に対する位置づけについては、前報で詳述したが、以下に簡単に要約しておく。

東京西部に広がる多摩NTは計画人口34万人の我が国最大のニュータウンであり、1971年に最初の入居が実現して以来40年の歴史を刻んでいる。新規開発は終了し、ストックマネージメントの段階に入っている。この中でも、福祉亭が立地する諏訪・永山地区は初期入居地区であり、その高齢化率は地区平均で26%と全国平均（23%：2011年）を既に上回っている。さらに、諏訪4,5丁目、永山4,5丁目などの一部街区では高齢化率が30%を超えており、超高齢社会という意味でもモデル的な考察の対象地域と考えられる。一方、高齢者のうち約8割は自立的な地域継続居住が可能な「元気高齢者」と考えられ、こうした人々が持続的に地域居住を継続して行くための支援環境を地域社会に多層的に整えて行くことが

大切になってくると考える²⁾。諏訪・永山地区ではこうした自立的な高齢者サポート拠点が次々と開設されてきており、筆者等は文献³⁾で、この数年でその数は10施設に及んでいること、およびその利用・認知のされ方の実態を詳しく報じた。

多摩NTに限らず、高齢者の地域交流の場・居場所などの重要性が認識されるなかで全国的にも行政、NPO法人、任意団体や個人が設立・運営する拠点が数多く形成されはじめており、文献⁴⁾～¹¹⁾などがあげられるように研究の蓄積も進んでいる。

こうした背景において、多摩NT永山商店街に2002年に開設された福祉亭は、ボランティアによって支えられて活発な活動が展開されている自立高齢者の居場所として全国的にも注目されており、多摩NTの高齢者支援スペースの嚆矢としての存在といえる。

前報ではこの福祉亭を対象とし、施設側からの調査として、3年間にわたる参与観察調査、年間を通じた利用状況に関する調査、一週間連続の詳細観察調査の三つを行い、福祉亭の活動内容、活動場面、個人による利用の様態等に焦点をあてて分析考察を行った結果を報告した。

本報ではこれを受け、利用者側からの調査として、福祉亭の常連利用者に対して生活歴を含めた詳細なヒアリング調査を行い、その

* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科
都市システム科学域 博士後期課程・修士(都市科学)

** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 助教

*** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域
教授・工博

Doctoral Course, Graduate School of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan Univ., M. Urban Science

Assistant Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ.

Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

在宅生活・地域生活の様態の類型を見出し、それぞれの利用者の地域生活にとって高齢者支援スペース・福祉亭がどのような意義を

表1 ヒアリング調査の概要

調査方法	ヒアリング調査 対象者ごとに30分から数日にかけて、福祉亭の利用、日常生活、地域生活の全般的な様子について半構造化インタビューを実施した	調査期間	2008年6月～9月 2010年8月～9月 2011年6月
		調査対象	福祉亭の常連利用者

表2 ヒアリング項目の概要

1. 福祉亭の利用について
(1) 福祉亭の利用はいつからですか
(2) 福祉亭の利用頻度はどのくらいですか
(3) 福祉亭に行く交通手段は何ですか
(4) 福祉亭を利用するようになったきっかけは何ですか
(5) 福祉亭の主な利用内容は何ですか
(6) 福祉亭で知り合った友達はいますか
(7) 福祉亭を利用したことでご自身や生活の変化などがあれば教えてください
(8) 福祉亭以外で(定期的に)、時間を過ごす場所を教えてください
(9) 福祉亭はご自身にとってどのような意味を持っていますか
(10) 福祉亭に希望することはありますか
2. 日常生活について
(1) 食事はどのようにしていますか
(2) 日常の買い物についてどうなっていますか
(3) 入浴について、どこのお風呂を利用していますか
(4) 趣味やいきがいは何ですか
(5) 外出頻度はどのくらいですか
(6) 近所とお付き合いについて教えてください
(7) 友人とお付き合いについて教えてください
(8) 外出先と外出の際に使う主な交通手段は何ですか
3. ご本人について
(1) ご出身はどこですか
(2) おいくつですか
(3) 現在どなたと一緒に住んでいますか
(4) 身の回りの世話をしてくれる人はいますか
(5) お仕事はしていますか
(6) 現在なにが治療を受けていますか
(7) 介護認定を受けていますか
(8) 1週間の大体の予定を教えてください
4. 住居・住まいについて
(1) お住まいは何処ですか
(2) 現在のお住まいには何年間住んでいますか
(3) 多摩市には何年間住んでいますか
(4) お住まいは集合住宅ですか戸建てですか
(5) お住まいはどのような所有形態ですか
(6) お住まいの間取りはどのようになっていますか
(7) お住まいは何階建ての何階ですか
(8) ご自宅で不便だと思う点はありませんか
(9) 現在のお住まいに今後も住み続けて行きたいですか
5. 緊急時について
(1) 緊急なこと、例えば急に気分が悪くなったり、病気になったなどの経験はありますか
(2) 緊急時、連絡をとる人は決めていますか
(3) 緊急時連絡システム装置を設置していますか
(4) 災害に対して、どのような準備をしていますか
①災害時の避難場所はご存知ですか
②災害時、安否確認の方法は決めていますか
③非常時の持ち出し品など準備していますか
④家の中の耐震対策は取っていますか

●男 ○女

		曜日類型			計
		曜日特定群	曜日指定群	全曜日群	
頻度類型	時々群	●	○	●○	4名 (●1・○3)
	定常群	●●●○	●●●●●●	●●●●●●●●	30名 (●17・○13)
	常連群		●	●●●●●●●●	14名 (●6名・○8)
計		5名 (●2・○3)	13名 (●8・○5)	30名 (●14・○16)	48名 (●24・○24)

図1 ヒアリング分析対象者の年間調査類型の内訳

●男 ○女

		滞在時間類型			計
		45分群	2時間群	長時間群	
回数類型	1日群	●●●●○	●●●●●	●●	14名 (●9・○5)
	2~3日群	●●●●●	●●●●●	●●●●●●	23名 (●10・○13)
	ほぼ毎日群	●●	●●●	●●●●	11名 (●5・○6)
計		16名 (●9・○7)	17名 (●6・○11)	15名 (●9名・○6)	48名 (●24・○24)

図2 ヒアリング分析対象者の週間調査類型の内訳

持っているかを分析考察することを目的とする。施設側からの調査(前報)と利用者側からの調査(本報)を組み合わせ、その活動内容と利用の様態、及びその地域社会における存在の意義を考察することを本研究の特色と考えている。

2. 福祉亭の概要と利用者類型

福祉亭の活動と利用のされ方については前報で詳述したが、ここではその簡単な要約をしておく。

2.1 福祉亭の概要 福祉亭は多摩NT永山商店街の空き店舗を改造して2002年に開設され、中核メンバー(理事4名)とボランティアによって運営されている。通行量の多いペデストリアンに面し、近くには保育園、スーパーマーケット、福祉会館などが建ち並ぶ。室内の広さは60㎡程度であり、37席が設けられている。月曜日から土曜日は10時から18時まで、日曜日は月2回13時30分から16時まで営業しており、利用者の制限は特になく、誰でも自由に利用できる。主なサービス内容は、食事と喫茶(酒類も含む)、趣味活動(囲碁・将棋等)および交流の場の提供である。前報による年間調査では、一日平均約40名の利用、年間延べ12,000名ほどの利用がある。

2.2 年間調査による利用者類型(年間調査類型) 前報での年間利用実態調査では、個人特定利用者372名のうち年間12回以上の利用があった106名について分析し、来店の頻度によって、

- [時々群]: 月に1, 2回の利用がある者
- [定常群]: 週にして1, 2回程度の定期的な利用がある者
- [常連群]: 週にして3, 4回程度もしくはそれ以上の利用がある者の三つに分類し、これを[頻度類型]と定義した。また、利用者の曜日選択の傾向について、
- [曜日特定群]: ある一つの曜日を選択して来店する群
- [曜日指定群]: 2, 3の曜日を選択して来店する群
- [全曜日群]: 曜日を特に選択せずどの曜日にも平均的に来店する群の三つに分類し、これを[曜日類型]と定義した。

2.3 週間調査による利用者類型(週間調査類型) 前報での週間利用実態調査では、138名の個人特定利用者について分析を行ったが、それを来店日数によって、

- [1日群]: 調査の週に1日だけ来店した群
- [2~3日群]: 同、2または3回来店した群
- [ほぼ毎日群]: 同、4回以上来店した群
- の三つに分類し、これを[回数類型]と定義した。さらに、福祉亭に滞在した時間から、
- [45分群]: 滞在時間が45分未満の利用者(食事や喫茶のみ)
- [2時間群]: 同、45分以上120分未満の利用者(同上に会話や趣味)
- [長時間群]: 同、120分以上の利用者(長時間の滞在を愉しむ)
- の三つに分類し、[滞在時間類型]と定義した。

なお、週間調査の個人特定利用者138名の内71名は利用者コード番号(以下:ID)によって年間調査との照合が可能であり、この71名については年間調査の類型と週間調査の類型との関係を分析した。

3. ヒアリング調査による福祉亭利用者の基本属性と利用様態

3.1 ヒアリング調査の方法と概要

表3 ヒアリング分析対象者の基本属性と地域生活様態の概要

ID	I 基本属性				II 日常生活				III 福祉亭の利用				IV 福祉亭以外の居場所利用頻度					V 趣味活動		VI 社会参加		VII 交流		VIII その他		
	年	住居	家族形態	同居している子や孫	買い物	外出	頻度	滞在時間	利用年数	交通手段	友人増加	1	2	3	4	5	内容	頻度	内容	頻度	近所	友人	介護認定	利用の頻度	入院回数	多摩市外の回数
37	92	永 賃	29 独居	市 (稀)	●	■■■■■■	公 ●	45m	9 歩	●						酒	■			挨拶						29
122	78	永 高	33 夫婦	市	●	■■■■■■	公 ●	45m	9 歩	有						革細工、談話、TV	■■■■			挨拶	一緒に外出	要支援1	ヘルパー	週1		33
7	64	永 賃	40 本人+子		●	■■■■■■	公 ●	2h	9 歩	有	●	●	●	●	●	歌、芸術品鑑賞、グルメ	■■■■	ボ	■	挨拶	一緒に外出					40
41	75	永 高	6 独居	外	●	■■■■■■	公 ●	45m	6 歩	有	●	●	●	●	●	運動、ダンス、歌、酒、交流、学習	■■■■	ボ	■	立ち話	一緒に外出					6
35	77	永 高	9 夫婦	市	●	■■■■■■	送 ●	2h	8 送	有						囲碁	■					要介護3	ヘルパー	頻繁に入院	9	
85	79	永 賃	29 夫婦	市	●	■■■■	自 ●	2h	4 歩	有	●	●				ダンス、体操	■■■	仕 歩	■	挨拶	趣味の場で			月1	29	
277	65	永 不明	3 夫婦+子	外	●	■■■■	歩 ●	2h	3 歩							囲碁	■				不明(認知)				3	
131	90	永 賃	40 独居		●	■■■■	公 ●	45m	9 歩		●	●				読書、歌	■			挨拶	趣味の場で				40	
104	91	永 高	20 夫婦	外	●	■■■■	公 ●	45m	忘 歩		●	●	●	●		TV、ダンス	■								20	
215	53	諏 都	10 独居		●	■■■■	歩 ●	長	8 歩	有	●					ネット	■■■■								20	
240	72	諏 都	40 夫婦+子		●	■■■■	自 ●	45m	5 歩		●					酒	■		仕	■	挨拶				40	
79	75	永 賃	40 独居	不明	●	■■■■	自 ●	2h	9 自		●							仕	■■■		不明				40	
107	84	永 賃	38 夫婦		●	■■■■	送 ●	2h	9 歩	有	●	●				短歌、TV、折り紙	■			挨拶	一緒に外出	要支援2	デイサービス	月2	38	
68	85	永 賃	7 夫婦+子	夫婦+孫	●	■■■■	公 ●	2h	7 歩	有	●					歌、麻雀	■■					要支援1		3月毎	7	
36	67	永 高	9 夫婦	市	●	■■■■	公 ●	45m	8 歩	有	●					ダンス	■■			挨拶	趣味の場で				9	
149	65	外 賃	20 夫婦+子		●	■■■■	公 ●	2h	8 公	有	●	●				撮影	■			不明	一緒に外出				-	
140	70	永 分	40 夫婦		●	■■■■	公 ●	長	9 歩	有	●	●	●			酒、賭け事	■■■■			挨拶	一緒に外出			月1	40	
88	65	永 分	40 独居		●	■■■■	公 ●	2h	8 歩		●					DVD観賞	■■■■							6週毎	40	
65	75	諏 都	40 夫婦+子		●	■■■■	車 ●	長	2 車		●					囲碁	■■■■			訪問				20日毎	40	
117	74	永 高	8 独居	外	●	■■■■	車 ●	45m	8 歩	有	●	●	●			歌、琴、TV	■■■■			挨拶	一緒に外出			週4	8	
119	84	永 高	11 独居	市	●	■■■■	公 ●	2h	9 歩	有	●	●	●			踊り、ダーツ、歌、麻雀、ゲートボール	■■■■	ボ	■	立ち話	趣味の場で				41	
133	77	永 高	5 独居	外	●	■■■■	公 ●	2h	9 歩		●	●	●	●		踊り、陶芸	■■■■	ボ	■	挨拶	一緒に外出			月2	20	
109	68	市 分	35 独居	外	●	■■■■	バイク ●	45m	忘 歩	有	●	●	●	●		TV、談話、歌	■■■■	ボ	■	立ち話	趣味の場で			週1	40	
18	62	永 分	27 夫婦+子		●	■■■■	公 ●	長	9 歩	有	●					裁縫、料理、買い物	■■■■	ボ	■	訪問	一緒に外出				36	
13	72	永 高	6 夫婦	市	●	■■■■	公 ●	45m	6 歩	有	●	●	●			酒、談話、猫散歩	■■■■	ボ	■	挨拶	趣味の場で			週1	6	
48	51	永 賃	10 独居		●	■■■■	公 ●	45m	5 歩	有	●	●				音楽、ネット	■	仕	■■■	挨拶	一緒に外出				10	
19	68	永 賃	7 夫婦	市	●	■■■■	公 ●	長	7 歩		●	●				仕事、将棋	■■	仕	■■■	挨拶				月1	7	
45	76	永 民	5 独居	市	●	■■■■	公 ●	長	5 歩		●					囲碁、将棋	■■	仕	■■■					2月毎	5	
89	70	永 分	23 独居		●	■■■■	車 ●	長	9 歩	有	●	●	●			歌、囲碁	■■	仕	■■■	挨拶	一緒に外出			月1	23	
151	78	永 賃	40 夫婦	外	●	■■■■	車 ●	2h	9 歩	有	●	●	●			テニス、酒	■■■■	仕	■■■	挨拶	一緒に外出				40	
78	83	諏 賃	40 本人+娘	夫婦+孫	●	■■■■	歩 ●	45m	忘 歩		●					仕事、TV、ドライフ、麻雀、歌	■■	仕	■■■	挨拶	一緒に外出				40	
63	74	永 高	9 独居		●	■■■■	車 ●	45m	9 車	有	●	●	●					仕	■■■		一緒に外出				9	
95	63	永 賃	23 夫婦+子		●	■■■■	公 ●	45m	9 歩	有	●	●	●	●		学習	■	ボ	■■■	立ち話	電話				35	
134	77	諏 都	40 夫婦	外	●	■■■■	自 ●	45m	9 車	有	●	●	●	●		仕事、歌、旅、買い物、煙	■■■■	ボ 仕	■■■■	立ち話	一緒に外出			月2	40	
51	85	永 高	6 独居	市	●	■■	送 ●	2h	6 送	有						将棋	■					要介護2	ヘルパー	週1	6	
15	83	諏 都	3 夫婦		●	■■■	公 ●	長	7 公		●					将棋、猫散歩	■			挨拶			宅配		40	
146	78	永 高	8 夫婦	外	●	■■■	歩 ●	長	8 歩							将棋、麻雀	■■			挨拶					8	
16	78	諏 都	3 夫婦		●	■■■	公 ●	2h	7 公	有	●	●	●			読書、歌、猫散歩	■■	ボ	■	挨拶	一緒に外出			宅配	月1	40
147	75	諏 都	7 独居	市	●	■■■■	自 ●	45m	4 歩		●													2月毎	40	
116	76	永 賃	30 独居	近	●	■■■■	公 ●	2h	9 歩		●									挨拶					30	
33	81	永 高	9 夫婦	市	●	■■■■	公 ●	長	9 歩	有	●	●				囲碁、TV	■■			挨拶	一緒に外出			週2	9	
34	77	永 高	9 夫婦	市	●	■■■■	公 ●	2h	9 歩	有	●	●				盆栽、ネット	■■			訪問	一緒に外出			月2	9	
28	70	永 賃	6 独居	市	●	■■■■	公 ●	長	6 歩	有	●	●				絵画(製作・鑑賞)、TV	■	仕	■ (不定)	挨拶	一緒に外出				6	
110	83	永 分	23 独居		●	■■■■	公 ●	長	9 歩	有	●					麻雀、俳句	■■	ボ	■ (不定)	訪問	一緒に外出				23	
82	60	諏 都	5 本人+親		●	■■■■	公 ●	長	3 歩		●	●	●			囲碁、将棋、賭け事	■■	仕	■■	挨拶	電話				5	
86	82	永 高	7 独居	近	●	■■■■	Taxi ●	長	7 歩	有	●	●	●	●		民謡、太鼓、歌	■■■■	ボ	■■	立ち話	趣味の場で	要支援2	ヘルパー	週3	7	
21	64	諏 都	4 夫婦	市	●	■■■■	公 ●	長	9 公	有	●	●				TV、談話、仕事	■■■■	仕	■■■	挨拶	一緒に外出		宅配	月2	34	
99	57	市 分	16 夫婦+子		●	■■■■	公 ●	2h	5 公	有						音楽	■■	仕	■■■■	挨拶	一緒に外出				16	

凡【空欄】無し	【居住地】 諏 諏訪 高 永山 近 地区内 市 多摩市内 外 多摩市外	【住居所有形態】 都 都営住宅 高 U R高齢者優良賃貸住宅 賃 U R賃貸住宅 分 U R分譲住宅 民 民間賃貸住宅	【外出範囲】 ● 地区内 ● 多摩市内 ● 多摩市外	【滞在時間類型】 45m 45分群 2h 2時間群 長 長時間群	【交通手段】 歩 徒歩 自 自転車 車 自家用車 公 バス、電車 送 送迎	【居場所利用頻度】 ● 月1日 ● 週1日 ● 週3日(以上)	【趣味活動】 ネット インターネット 猫散歩 野良猫の世話 賭け事 競馬、パチンコ	【社会参加】 仕 仕事 ボ ボランティア活動
例【利用年数】 忘：覚えていない								

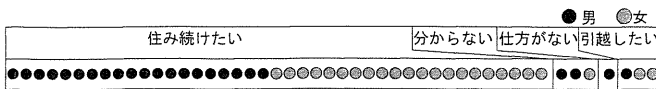


図9 継続居住の意向

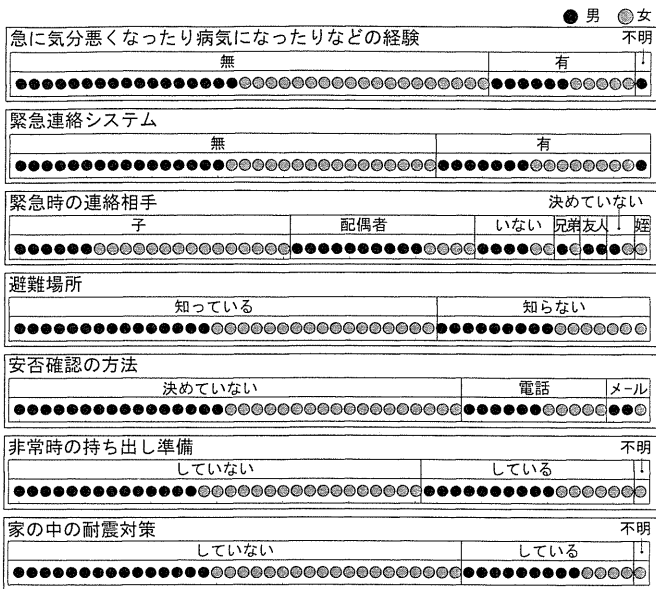


図10 緊急時について

居住年数	利用年数									覚えていない
	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年		
1年以下									● (市外)	
2年										
3年		●								
4年										
5年		●		●						
6年					●●					
7年						●●				
8年										
9年								●●●●●		
10~29年			●	●		●●	●	●●●●●	●	
30年以上	●●				●●	●●●●	●●●●	●●●●●●●●	●●	
計	2名	2名	1名	2名	6名	11名	2名	19名	3名	

図11 福祉亭の利用年数と多摩市居住年数

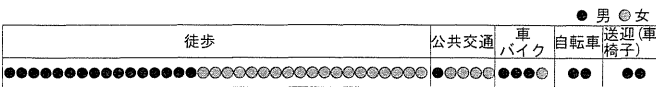


図12 来店の交通手段

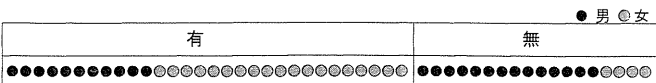


図13 福祉亭を利用してからのできた友達の有無

表4 利用後の生活変化

利用後の生活変化	人数
友達、話相手が増えた	8
生活が楽しくなった	4
疲れたときに気楽に来られるいいところがあった	2
外へ出るようになった。話ができて楽しくなった	1
生きがいがあった	1
人の役に立つようになった	1
寂しくなくなった	1
食事が楽になった	1
特にない	29

表5 利用のきっかけ

利用のきっかけ	人数
友人や家族に紹介された	21
なんとなく	7
食事のため	5
スタッフからの呼びかけ	2
ボランティアをするため	2
発起人	3
看板を見て	2
イベント	2
たまたま通りかかった	2
職場が近所だから	1
近くに住んでいるから	1

のみ居住の人で、地区内又は市内に子や孫が居住しているケースもある(図6)。

(4) 居住地と多摩市の居住年数(図7) 福祉亭が立地する永山地区の居住者が35名と過半を占める。多くが徒歩圏内に居住していることが確認できる。また、多摩市での居住歴が10年を超える人が過半となっている。

(5) 住居種別(図8) 大半がエレベーターの無い中層階段室型住居に居住している。諏訪・永山地区の都営、UR賃貸・分譲住宅に居住する人が多いが、永山地区で近年、既存UR賃貸住宅の改修によるUR高優賃が整備されてきており、この居住者も15名と多くなっていることは注目される。

(6) 継続居住の意向(図9) 継続居住の意向は高く、48名のうち引越したいと思っている人はわずか3名である。その3名全員がエレベーターのない集合住宅の3階以上で暮らしており、加齢とともに階段の上り下りに苦勞しているという理由から1階に引越したいと答えている。

(7) 緊急時について 緊急時への対応の意識等について図10にまとめた。緊急連絡システムが設置されていると答えたのは15名で、その全員がUR高優賃の居住者である。緊急連絡システムが無く緊急時の連絡相手もいない人は5名おり、そのうち4名が独居である。このような人々には孤独死の可能性などが懸念される。

3.3 福祉亭の利用

福祉亭の利用のきっかけ、来店の交通手段、利用前後の生活の変化、それぞれにのっての福祉亭の意義、などについて尋ねた結果を以下にまとめる。

(1) 福祉亭の利用歴 多摩市での居住歴と福祉亭の利用歴の関係を図11に示した。多摩市居住歴30年以上の人が20名、1971年初期入居からの継続居住の人は10名いる。福祉亭は2002年の開設であるが、開設当初からの利用者が19名、5年以上の利用歴の人が40名である。まさに顔なじみの常連客といえる。多摩市居住歴と福祉亭利用歴が一致する人が16名いるが、1名を除き、多摩市外から前述の永山地区のUR高優賃に入居して来て、それ以来福祉亭を利用するようになった人である。

(2) 来店の交通手段(図12) 前述のように諏訪・永山地区の居住者が大半を占めることもあり、多くが徒歩での来店である。車椅子で送迎されている2名は介護認定を受けている人である。

(3) 福祉亭を利用するようになってからの生活の変化 福祉亭を利用するようになって友達が増えたと答えた利用者は30名と多い(図13)。福祉亭を利用するようになってからの地域生活の変化

表6 利用者にとっての福祉亭の意義

福祉亭の意義	人数
憩いの場	8
交流の場	8
生きがい	2
地域デビューの場	2
自分の家にいるような感じ	1
自宅以外にかなり重さをもつところ	1
ありがたい	1
交流を広げる場	1
食事や飲酒も出来て、みんなにあえるところ	1
来ることで元気づけられる	1
人生の勉強	1
特にない	21

表7 利用者の要望

福祉亭に対する要望	人数
いまのままできて欲しい	6
濃さなくて欲しい	2
若い方にも来て欲しい	2
夕飯も提供して欲しい	3
特にない	35

趣味の種類	頻度					
	無し	1	2	3	4	5以上
時々群 (4名)		●		●●		●
定常群 (30名)	●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●		●●
常連群 (14名)	●●	●●	●●●●	●●●●		
計	4名 (●2・●2)	12名 (●6・●6)	17名 (●12・●5)	11名 (●2・●9)	0名	4名 (●2・●2)

図18 趣味活動の数(頻度類型別)

趣味の種類	頻度												
	サークル	囲碁・将棋・麻雀	談話交流	仕事	猫散歩	グルメ・飲酒	ドライブ・旅行	読書・学習	TV・DVD	音楽・芸術鑑賞	賭け事	その他	
1	●	●●●●				●●		●	●			●●	
2	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●		●	●	●●		●●	●●	●●	●	●●	
3	●●●●●●●●●●	●●	●●●●	●	●●	●●		●●	●●●●	●	●	●●●●	
5以上	●●●●●●●●●●	●	●	●●		●●		●				●●	
計	25名	18名	5名	4名	3名	8名	2名	5名	10名	4名	2名	13名	

図19 趣味活動の数と種類

居場所の種類	頻度					
	無し	1	2	3	4	5以上
時々群 (4名)	●	●				●●
定常群 (30名)	●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●	●●●●
常連群 (14名)	●●	●●●●	●●●●	●●		●
計	6名 (●4・●2)	15名 (●7・●8)	10名 (●5・●5)	8名 (●5・●3)	3名 (●2・●1)	6名 (●1・●5)

図20 福祉亭以外の居場所の数(頻度類型別)

場所	頻度											
	諏訪・永山の居場所 ³⁾				公共施設			福祉施設		商業施設		その他
1	●	●	●	●	●●	●●	●●	●	●	●●	●●●●	
2	●	●	●	●	●●	●●	●	●	●	●●	●●●●	
3	●	●	●	●	●●	●●	●	●	●●	●●	●●●●	
4	●	●	●	●	●●	●●	●	●	●	●	●●●●	
5以上	●	●	●	●	●●	●●	●	●	●	●	●●●●	
計	35名 (●10・●25)				29名 (●13・●16)			2名 (●2)		18名 (●12・●6)		17名 (●10・●7)

図21 福祉亭以外の居場所の数とその場所

頻度類型	頻度					
	無し	時々不定期	週1,2日	週3日	週4日	週5日以上
時々群 (4名)	●●	●	●			
定常群 (30名)	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●	●●●●
常連群 (14名)	●●●●●●●●●●	●●●●	●●	●●		●
計	22名 (●12・●10)	8名 (●1・●7)	6名 (●4・●2)	7名 (●4・●3)	1名 (●4)	4名 (●2・●2)

図22 社会参加(仕事やボランティア)の頻度(頻度類型別)

近所友人	頻度				
	無し	あいさつ	立ち話	家の行き来	計
無し	●●●●●●●●	●●●●●●●●		●	15名 (●12・●3)
電話・メールで連絡	●●●●	●	●		5名 (●2・●3)
趣味の仲間		●●●●●●	●●●●		7名 (●3・●4)
一緒に外出	●●●●	●●●●●●●●	●●	●●●●	21名 (●7・●14)
計	13名 (●8・●5)	25名 (●14・●11)	6名 (●1・●5)	4名 (●1・●3)	48名 (●24・●24)

図23 近所及び友人との交流の程度

多人数と交流するサークル活動に参加する度合いが高いが、男性は相手が少数で済む囲碁・将棋などを趣味活動としてあげるケースが多い。

(2) 福祉亭以外の居場所 ここでは福祉亭のように一定の頻度で訪れ時間を過ごす場所を‘居場所’として定義する。福祉亭以外にそのような場所を持っているかを尋ねた結果を図20にまとめた。福祉亭以外に1～3箇所程度の居場所を持っている人が多いが、福祉亭以外には居場所を持っていないと答えた人が6名いる。福祉亭以外の居場所としてあげられている場所として(図21)、冒頭の本研究の背景と目的の章で述べた諏訪・永山地区の居場所³⁾をあげた場合が最も多く、ついで公民館、総合福祉センター、図書館などの地域公共施設があげられている。又、喫茶店や居酒屋、レストランなどの飲食店をあげるケースもあるが、諏訪・永山地区の場合これらは徒歩20分程度の永山駅周辺又はそれ以遠に立地している。

(3) 社会参加(図22) 有職者は男性11名、女性4名で、またボランティア活動に参加している人は男性3名(うち2名は仕事も持っている)、女性が10名となっている。このボランティア活動には福祉亭での活動も含まれるが^{注2)}、さらに特別養護老人ホームや障害者施設などでのボランティア活動に参加している人もいる。

(4) 近所、友人との交流(図23) 近所、友人ともに交流がない人が7名おり、福祉亭の存在がなければ孤立化が懸念される人々である。男性は、近所との付き合いはあいさつ程度の人が多く、また友人関係でも友人がいない人が半数の12名になっているなど、交流関係は一般に浅い段階にとどまる。定年前には地域との結びつきが弱く、引退後直ちには近所や地域に交流関係をもとめることが難しい男性の状況を示唆しているといえる。一方、女性は‘一緒に出かける友人がいる、家を行き来する’などの親密な交流関係の友人を持っている人が男性に比べて多い。女性の方が地域での交流関係を育てることに優位である一般的な状況がここでも示される。

4.3 小括 独居では買い物や食事の用意を自力でできることが前提になるが、自立度が下がり近所に居住する家族の支援を受けているケースが少数ながらみられる。高齢期の男性を中心として、‘食のサポート’が大切な課題になっていると考えられる。夫婦居住の男性は買い物や食事の用意などを妻に依存する傾向が強い。男性は女性に比べると地域に交友関係を持つことを苦手とする側面が垣間見られる。地域交流の場の必要性を示唆しているともいえる。

5. 福祉亭常連利用者の地域生活類型と生活像

以上、ヒアリング分析対象者48名の基本属性と在宅生活・地域生活の様態を分析してきた。一部が家族、近親者、ヘルパーに支えられているものの共通して在宅自立であり、その大半がほぼ毎日外出する高齢者である。このことを前提としても、福祉亭以外に地域の居場所を持っておらず趣味活動や交流関係なども不活発な人から、福祉亭以外の地域社会の多様な居場所も使い分けながら趣味、ボランティア、交流などに積極的且つ活発な人まで、多様な様相を示していることがわかる。以下でその全体像について地域生活の活発度から類型化を試み、この類型毎に生活像を描くことを試みる。

5.1 地域生活様態の類型化

ここでは、地域生活の活発度から福祉亭常連利用者の類型を導くことを試みる。用いる指標として、4.2で分析した地域生活の様

態の項目のうちの、

- I) 福祉亭以外の地域社会の居場所の有無と数
- II) 趣味活動の有無と数
- III) 仕事・ボランティアなどでの社会参加の度合い
- IV) 近所や友人との交流関係の活発度

の4つを設定した。その上で、個人々の状況をそれぞれの指標毎に表8に示す段階度数で評点化し、4指標の合計度数を集計した。最小は4指標とも[0]の計0度、最大は4指標とも[3]の計12度である。

- この合計度数により、
- [福祉亭依存型]：度数 4 以下
- [悠々型]：度数 5～8
- [活発型]：度数 9 以上

と分類することにした。これを、福祉亭常連利用者の地域生活類型と定義する(図24)。

[福祉亭依存型]に属する人は、福祉亭以外に地域社会の居場所が無い或少なく、趣味活動や社会参加、交流関係が活発でなく、福祉亭の存在が地域生活において極めて大きな意味を持つ人々と解釈できる。逆に[活発型]に属する人は、文字通り多方面において極めて活発な日常生活を送る人で、趣味、社会参加、交流活動など全般に積極的で、福祉亭は幾つかの居場所のうちの一つとしての意味を持つ人と解釈できる。この中間の[悠々型]は、それぞれの指標毎に一定の参加度を示す平均的な高齢者像の人と解釈される。

表8 利用者の地域生活類型分類の指標

度数	I 居場所		II 趣味		III 社会参加 (仕事やボランティア)		IV 交流	
	数	分類段階指標	数	分類段階指標	頻度	分類段階指標	友人と近所 (程度が高い方を優先)	分類段階指標
0	0	無	0	無	0	無	近所：無し 友人：無し	無
1	1, 2	少	1	少	時々 不定期	低	近所：あいさつ 友人：電話メールで連絡	薄
2	3, 4	中	2, 3	中	週1, 2日	中	近所：立ち話 友人：趣味の仲間	中
3	5以上	多	4以上	多	週3日以上	高	近所：家の行き来 友人：一緒に外出	濃

5.2 地域生活類型毎にみた福祉亭利用者の生活像

以下に、地域生活類型毎に若干の解釈を記し、典型例を抽出してその生活像を概説する。それぞれの基本属性、地域生活様態等について、図25にまとめた。

(1) 福祉亭依存型 平均年齢75歳。男性が女性よりも2倍以上多い。このタイプは、日常生活を家族に依存する傾向があり、社会的活動も少ない。この類型に属する人は、ヒアリングで実際にお会いしてみると、他に比べ、ADL全般が低い傾向にあることが感じられた。福祉亭以外には地域社会の居場所が無い或少ないタイプである。この人々の地域生活において、福祉亭の存在とそこで出会う人々との交流は大変大きな意味があると言える。

事例：ID35 [定常群]：男性・77歳：夫婦居住

生活履歴：東京出身。約10年前に永山に引っ越して来た。不動産屋の経営をしていて、一時は最大60人の社員を抱えていた。福祉亭の発起人の一人である。妻は67歳。

生活様態の特徴：日常生活は全て妻に任せている。糖尿病を患っておりADLが低下しているため、在宅時は喫煙時を除いて横になる時間が長い。唯一の生き甲斐は福祉亭へ通うことである。2009年に道で転んだことがきっかけで入退院を繰り返すようになり、認知症になった。一時期、市内のグループホームに入居しており、週末だけは自宅に戻っていた。その際必ず福祉亭で食事をとり、囲碁の仲間と2, 3時間楽しい時間を過ごしていた。また、認知症になって以来物事が分からなくなる事が多いが、福祉亭の電話番号と友人の名前ははっきりと覚えていて妻はいう。この高齢者の生活領域は自宅のある永山3丁目から福祉亭のある4丁目の間に限られるが、現在では家族の付き添いが無いと来店することが出来ない。日常生活で家族の支援が不可欠である。老々介護になっているが、福祉亭で囲碁を打つ数時間の間、妻は自分の趣味のフラダンスに出かけることができる。

事例：ID51 [常連群]：男性・85歳：独居

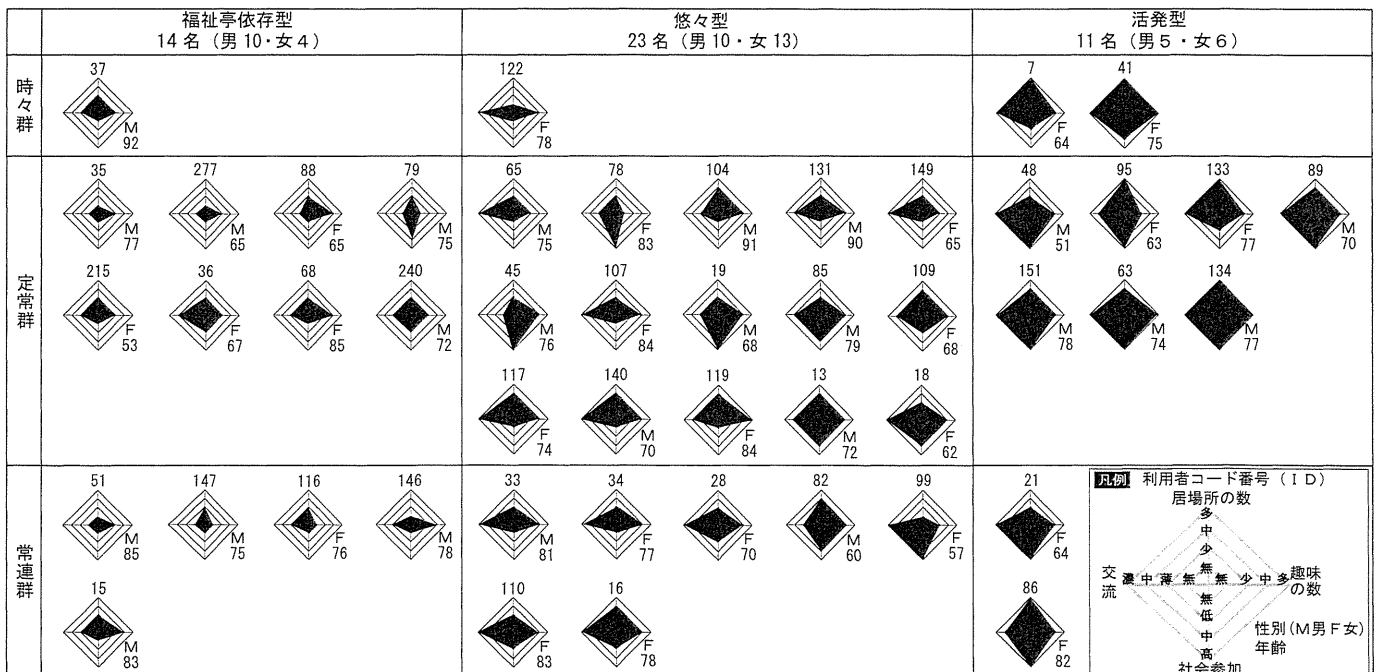


図24 福祉亭常連利用者の地域生活類型

生活履歴：地方出身。20数年前に息子が亡くなり、孫を育てるために仕事を辞め八王子市に転居した。6年前に永山のUR高優賃に引っ越してきた。

生活様態の特徴：永山に転居して来た当時は自宅に閉じこもっていたが、友人の紹介で毎日福祉亭に通うことになった。以前は毎日午後1時半以降18時まで福祉亭で将棋を楽しんでいたが、2010年6月以降身体能力の低下により自力での呼吸が困難となり、一人の外出は不可能となった。現在は市内に居住する息子の嫁にほぼ毎日訪問してもらっている。また介護保険によってヘルパーに掃除や食事の世話をしてもらっている。家族やヘルパーの付き添いが必要である。福祉亭利用のプロセスでボランティアスタッフや利用者たちがこの利用者のパーソナリティーやADLの状況をよく知っており、体調の良い時には福祉亭の利用者やスタッフに送迎してもらう場合もある。その際、他の利用者皆に声をかけられ、スタッフはおかゆなど本人の体調に合う料理を用意する。

(2) 悠々型 平均年齢75歳。地域社会の中にさほど多くの居場所を持っておらず、平穏な地域生活をおくるタイプと考えられる。

事例：ID45 [定常群]：男性・76歳：独居

生活履歴：東京出身。5年前に都内から永山に引っ越して来た。

生活様態の特徴：痛風を患っており、昼食は抜きにしている。日常生活は全て自分で用意し、市内に居住している息子と月に数回会う。週3日都内の仕事場へ出かけ、その他の日には福祉亭で囲碁や将棋を楽しむ。仕事があるため生活の領域は広いが、地域の近所付き合いはなく、友人もいない。福祉亭に通うことによって友人が増

え、地域の情報も得られるという。

(3) 活発型 平均年齢が70歳と、福祉亭依存型と悠々型に比べ5歳低い。男性と女性がほぼ同数(男5名女6名)である。全員が仕事やボランティアなど社会的活動に参加している。地域社会の中で活発に活動し、福祉亭以外にも多くの居場所を持つタイプである。福祉亭はそのなかのひとつとしての意味を持つが、それ等の居場所の中でも福祉亭の持つ意味は大きいと考えられる。

事例：ID134 [定常群]：男性・77歳・夫婦居住

生活履歴：地方出身。諏訪に40年住んでいる。自宅は古くなったが、愛着があり離れることができない。妻は80歳である。

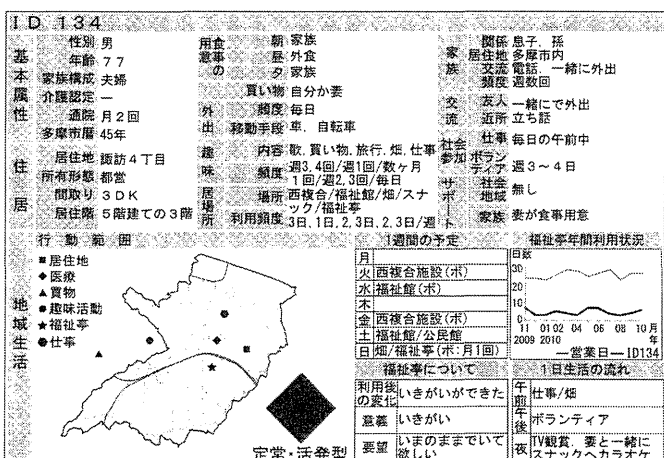
生活様態の特徴：現役の自転車修理屋である。77歳の今でも毎日、車で多摩市を巡回し仕事をしている。カラオケが趣味で、老人ホーム、諏訪福祉館、総合福祉センター、福祉亭などで自己所有の機器を持ち込んでみんなとカラオケを楽しんでいる。この人の日常生活はとても活発であり、自分のことよりも他人へのサービスを優先させている。生活領域は広く、社会的交流も幅広い。

6. 考察とまとめ

以上をふまえて、地域や高齢者にとっての福祉亭の存在の意義をまとめ、今後の展望と課題について述べる。

6.1 福祉亭の意義

(1) 交流：福祉亭は趣味活動や談話などの交流の場を提供することにより、高齢者と地域社会を繋ぐ機能をはたしており、地域の交流の場の意味を持っている。特に地域に交友関係を持つことを



注：週間予定を変更する場合がある。ボ：ボランティア。

図25 福祉亭常連利用者の地域生活類型の事例